

二、総理総裁というもの

1 エリート

総裁に選任された池田さんは、七月十八日の国会において型通り内閣の首班に選ばれた。池田さんは非常に傑出した偉才であるかと問われるれば、私は無条件に然りとは答えられない。総理総裁に要求される道義感や決断力、知識や智恵、体軀や容貌、閲歴や家柄、その何れの要素をとり上げてみても、またその各要素を十種競技のようにそれぞれ採点し、その総合点を求めてみても、日本国内には池田さんより秀れた採点をかちとり得る方が数多くおられるにちがいない。神は、どの時代にも、各民族にそれぞれその必要とする指導者を恵んであるものだといわれる。しかしそのようなエリートをして、必ずその民族の現実の指導者にするよう仕組んであるようには思えない。日本の山野や海浜、工場や街頭には、秀れた資質に恵まれつつも、所を得ることなく

埋れている無名のエリートが、数多く生存しているにちがいない。

ある特定の人が、総理総裁の印綬を帯びるということは、そのように考えてみるといわば偶然であり、たわいもないもののようにしか思われない。ことに今日の場合、内閣総理大臣は国会議員でなければならぬという憲法上の制約がある。この制度の是非はともかくとしても、これが日本における総理の選考範囲を著しく制約し、その選考を容易にしておることだけは否めない。従って七一七人の国会議員の中で、最も総理に選ばれやすい立場にあるごく少数の人々に、その選考が収斂されてくるわけで、池田さんがたまたま総理の座に最も有利な至近距離におられたにすぎないのではなからうか。

2 総理総裁の在り方

七月十四日の夕刻、総裁の地位についた池田さんに、私は「とうとう貴方も総裁になられましたね」と申し上げた。池田さんは感慨深そうに「うん」と答えられてしばらく沈黙が続いた。次いで私は、「貴方は東京に出てこられた当時、何時の日か今日の地位につけるものと思っていましたか」と重ねて聞いてみた。もちろん池田さんの答えは「否」であった。さらに私は「本来、

期待していなかった地位につかれたとすれば、現在与えられた地位におられることが如何に短くとも、文句のいいようもないわけですね。極端にいえば、朝に組閣して、夕べに倒れても已むを得ないのでないでしょうか。また政権担当を何時まで許されるかは、国民が決めることであつて、貴方がお決めになることではないと思います。ついではこの際、一つお約束を願いたいことがあります。それは、貴方ならびに貴方の周辺の者の間においては、長期政権という言葉に絶対の禁句にしていたいただきたいのですが」と詰め寄つたところ、池田さんは素直に「その通りだ」と答えられた。

次に私は「總理總裁たる方は、徹底的に庶民になりきつていただかなければならない。庶民と隔絶した意識と生活の中からは、庶民の納得のゆく政治ないしは庶民の協力が得られる政策は生れてこないと思います。飽食暖衣、自らは安逸を貪りつつ、国民に向つて耐乏や節約を求め、国民の努力を要求しても、それは空念仏になることでありましょう。ついでには、この際、さらにお約束願わなければならぬことは、總理在任中はまず第一にゴルフを慎まれること、第二にお茶屋への出入りを自粛されることであると思ひますが、お約束していただだけましようか」と進言した。これに対しても池田さんは素直に「そつしよつ」と答えてくれた。

この約束はいずれも池田政権四年四力月の間に、ともかくも守ってくれた。池田さんが、四年四力月の長きにわたって政権の座を占めることを許されたのは、国内外の環境に恵まれ、党内外の支持を受けられたことの外に、このような池田さんの心構えが与かって力があつたと思う。こういうことは、多少とも無理ややせ我慢を伴うものであり、酷評すれば偽善的でさえあるといわれないことはない。従って他人にこれを強いる勇氣はもとよりのないが、池田さんは自らそういう態度に終始された。また池田さんは、朝起きると朝風呂につかられるのを常とした。しかるのち庭に出てかしわ手を打って、天地神明に祈りを捧げることを忘れた日はなかった。また閣議の開始に当っては、必ず黙禱されていた。このことは小さいことのようにであるが立派な心掛けであつたと思う。

政治は政策を主軸として展開すべきものである。政策は政治の生命であるといわれておる。私はそれを否定しない。ただ現実の政治においては、その政策を策案し実行する主体の在り方の反省と、政策が実行できる条件と環境をどう整えるかに、大半の精力を傾注せざるを得ないのが実状である。そしてかかる努力は、政策の優劣にもまして重要なことであると思う。そうでなければ、政策是一片の作文に終り、不毛に陥らざるを得なくなるからである。

3 組閣

七月十八日、池田さんは国会で首班に選任され、直ちに總理大臣官邸に入り、まず党三役に益谷秀次（幹事長）、保利茂（総務会長）、椎名悦三郎（政務調査会長）の三氏を据えるとともに、私を内閣官房長官に内定して、閣僚選考にとりかかった。閣僚の選考は予想以上に順調に進み、同日の夜にはすでに閣僚名簿が出来上り、翌十九日の認証式を待つばかりとなつた。主流派のまとまつた支持を得た池田政権は、主流派が目論んだように池田、岸、佐藤、大野、石井の五派連合政権の性格をもつておつた。ただ、文部大臣に荒木万寿夫君、労働大臣に石田博英君を起用したことは、両君が当時いわゆる中間派に属するものとみられていただけに、池田首相の文教と労政に対する意欲が読みとれる人事であつた。また厚生大臣に中山マサ女史を任命したことは、わが国憲政史上初の婦人大臣の登用ということで、政界に一陣の涼風をもたらした。

組閣が終ると首相を中心に新内閣の撮影が行なわれるのが通例であるが、新聞その他に新聞僚の年齢、略歴、出身地はもとより、当選回数までが報道され、あわせて各閣僚の人物月旦やら詮衡事情、さらには国内外の反響などが掲載される。これはいわば一つの慣行であつて、特別に意味があるものではない。通常軽量ないしは二陣内閣だと評されたり、短命あるいは暫定内閣だと

きめつけられたりするのがおちであるが、池田第一次内閣は、やがて秋に予定される総選挙に臨む選挙管理内閣だというのが共通の評価であったようだ。

私は組閣の手法は造園のそれによく似ておると思う。造園は多種多様な木や草や石を組合せて、一つのまとまった庭園に仕上げるものである。組閣もまた、いろいろの人材を組合せて一つのまとまりに仕上げる術である。杉や竹のように直にして虚なるものもあれば、松のように多様な枝振りのものもあり、古びた苔もあれば巨岩や奇石もある。これらの素材は、一つ一つをとってみれば、何の変哲もないあり合せの木であり、石に過ぎない。巨石や巨木、奇岩や銘木ばかりではない。しかし、それらの素材を巧みに組合せることによって、その庭に一種の雅致をもたらすことができるというものだ。そこに庭師の苦心があり技術が要る。

組閣にも同様な趣がある。非常に秀れた人材あるいは逆に非常に無能な人物などというものは、およそ観念上の産物であって、実在の世界には通常届合せるものではない。人物評価の現実的照準は、その人の人物や能力の他に、同時代の他の人々との組合せないしは協力関係において、プラスを加え得る人物かどうかにおかろべきである。組閣に当って十六人の閣僚にどういふ顔ぶれを登用するかは、極めて限られた範囲の選択しか許されていない。素材はすでに与えられておる。問題はその組合せであり、その組合せを巧みに按配統御してゆくことが、首相のリーダーシップというものであるか。